

血縁観の持続と変容 — 現代韓国の親族関係 —

李文雄
(都知美 訳)

要 旨

韓国の社会組織を理解する上で、父系親族制度を見逃すことはできない。韓国の伝統社会では男系の先祖のみを重視する傾向がある。

この父系親族主義は現代韓国の様々な側面で生き続けている。たとえば姓氏の習慣。韓国の姓氏制度には二つの原則がある。(1)誰もが両親のうち父方の姓に従わなければならない。これによって父系は永遠に存続する。(2)姓は絶対に変えられない。このような親族制度は韓国の伝統社会ではうまく機能していた。しかし、現代韓国においては人道主義に反する深刻な社会問題を引き起こしている。たとえば、韓国では今でも父系縁者以外は養子にしない習慣がある。ところが現代人の生活様式が変化し、私生児や孤児がたくさん生まれているにもかかわらず、かれらの養子縁組の機会がきわめて少ない。これが、たくさん子どもたちがアメリカやヨーロッパの家族に養子としてもらわれていく主な理由である。

また、姓を同じくする男女の結婚が厳禁されていたので(同姓同本禁婚)、そのようなカップルから生まれた子どもは私生児と見なされてきた。この問題に対しては、最近、インセスト・タブーを近い範囲の血縁関係に留めるように婚姻法が改正されている。

‘姓不可変’の原則に対しても、女性の運動団体が激しく反対している。もしも離婚した女性が子どもを連れて再婚する場合、その子と義父の姓が異なることによって子どもが社会的差別を被りかねないからである。

これらは伝統的な親族制度と変化する現代韓国との間の裂け目から生じている問題である。

キーワード：韓国の親族制度、父系親族主義、海外養子縁組、姓氏制度、同姓同本禁婚

はじめに

ある社会の文化を説明する場合、社会組織は重要な鍵となる。社会組織はその社会の構成員が相互に関係を結んでいる方式を表しているものである。ある社会では社会階層における目上・目下の人など、垂直的關係を重要視する場合もあれば、またある社会では夫婦関係や兄弟

関係のような水平的な関係がより重要視される場合もある。さらに社会組織は、その原理において親族間あるいは同じ故郷である同郷人などの第一次的關係がいっそう重要視されたり、会社員あるいは政党の黨員など、特定の目的を中心に関心のあるもの同士による第二次的關係がより重要視されたりもする。このように、社会によって構成員が群れをなす(grouping)方式

が異なることで、その基礎となる組織原理もまた「ところ変われば品変わる」である。この場合、それらを比較して他のものよりも良いとか悪いとか、また正しいとか間違っているとかというように判断するのは不当であり、何の意味もなさない。なぜなら社会に応じた各々の方式が、それぞれの時代にそれぞれの環境の中で暮らしていくのに最も慣れている最善の方法であり、生活様式の部分であるからである。

このような意味で、韓国人が社会生活過程において、どのように考え、行動しているのかを理解するためには、人間関係の原理の把握が重要な鍵となる。それは、広い意味では韓国文化を理解する鍵でもあるが、もちろん、その鍵というのは、一つや二つほどの要因ではなく、実に複雑であり、一概にこうであると断定することはできない。ここではそのうちの一つ、韓国人の血縁観を議論の対象にしてみようと思う。たとえ現代の韓国社会が生活様式のあらゆる側面において著しい変化を経験してきたとはいえ、まだ伝統的な社会組織の原理が人間関係において重要な要因として作用していることは間違いない。この点から、我々は血縁が社会生活においてどのような意味を持っているかに注目しようとしているのである。

1. 父系親族社会の形成

まず、韓国人の社会組織における枠を提供している家族および親族制度についてみてみよう。どんな文化においても同じであろうが、韓国の伝統社会でも家族は社会構成員が出生とともに自然的に所属するもっとも基本的な社会単位である。伝統時代において、韓国人の生計維持の方法は稲作に基づく定着農耕生活であった。先祖代々に受け継がれてきた農業に従事すること以外で、他の職業につく機会がなかったために、ほとんどの者は自分の生まれた故郷の村で一生を終えることが一般的であった。また、農耕生活に現れる一般的な傾向として男性が主導的な位置を占め、結婚してできた子供のなかでも男性は両親の村に残り、父系親族集団を形成するようになった。その際、男性はほとんど

が配偶者を村の外に求め、男性中心の社会の中にそれぞれの配偶者を外から迎え入れたが、これは内部的結合と社会秩序を維持するのに、非常に役に立ったであろうと思われる。もし、配偶者を集団および居住地の内部から迎え入れたならば、すでに設定されている人間関係のためにいろいろな葛藤が起きかねなかったので、これを排除するための制度的な装置として、外から配偶者を求める外婚(exogamy)という方法を取ったのであろうと考えられる。

このように韓国の伝統社会においては、婚姻後に子供が両親の村に依然として残り、嫁いでいった娘たちは様々な地域に分散して住むようになった。このような外婚の慣習は、父系親族集団としての家門と家門とを結びつける機能を果たしつつ、結果的には韓国社会全体を統合させることに寄与した。武人たちが社会の指導層をなしている社会とは異なり、文人たちが支配層をなした韓国の伝統社会では、父系親族集団が構成単位としての重要な役割を果たしたのであり、そのなかでの秩序維持が即社会全般の秩序につながるものと、理解されたのである。

「分財記」をはじめ、いろいろな歴史的証拠を総合してみれば、韓国の伝統的な父系親族制度は、朝鮮時代である17世紀なかば以来、しだいに根を下ろすようになったものと推測されている。人間は生まれながらにしてそれぞれが特定の家門の間は生まれながらにしてそれぞれが特定のメンバーシップをもつようになるものと見なされ、個人は自分が属している家門の社会的な地位の程度によって評価された。

また、家族の家業から脱皮しては他の職業を得る機会もなかったために、家門を離れるというのは生活の基盤を失うのと同じと考えられた。同時に女性たちがこぞって他の家門に嫁いでしまったために、息子だけが残るようになり、父系親族はただの親族のカテゴリーというより、社会集団として機能することとなった。伝統社会では父系親族員らのほとんどが同じ居住地に住んでいたために、父系親族集団の単位はより明確になったのである。この集団は基本的に血縁に基づくものであり、そして、この集団の結合と内部的秩序は父母と子供の関係を規

制する“孝”すなわち親孝行の原理に基づいている。これによって韓国の伝統社会における血縁意識は、人間関係の中でもっとも中心的な要素の地位を固めていくようになった。

父系親族制度に基づく男系中心の社会においては、血縁はただの生物学的連結ではなく、社会学的な概念として認識された。つまり、人々が血縁関係のことを云々する場合、男系（male line）のみを重要視することが当然のことであると思われるようになったということである。それと同時に、女系の方の血縁関係者については、母方のもっとも近い親戚を除いて他の親戚のことはすぐに忘れてしまいがちである。以上の理由から、男系の血縁関係を明示している“族譜（家系図：genealogy）”をその貴重な文書として保存するようになるのである。ちなみに、この族譜は始祖から作成され、これまでに生存した父系の子孫たちをすべて記録している。中にはその規模があまりにも大きいために、一つの同姓同本の集団が数個の派に分かれ、その派閥ごとの族譜を保有するものもある。かつての族譜には各時代の娘らの姓名は記載されず、その代わり、彼女らの夫すなわち娘婿の名前だけが記載されていた。この方式によって、その家がどのような家門と姻戚関係を結んでいるのかを明確に説明しようとしたのである。

2. 姓氏制度

韓国人の血縁意識は、名字（姓氏）の習慣にも良く表れている。そこでは二つの原則が徹底して守られている。まず第一には、誰もが両親のうち、父の名字に従うという点である。それゆえに、名字は子孫を通じて永遠に引き継がれていくことが理想的であると見なされる。もし、家に息子が生まれず、代を引き継ぐことができなければ、それは先祖を冒瀆するということになる。息子がいないために、嫁にいった娘に財産や家系を譲るとしても、その娘が産んだ子供は夫の名字を名乗ることになるので、結局、家系（family line）は絶えてしまうものと見なされる。韓国では誰でも同姓同本の人間と婚姻することを、法的には勿論のこと、慣習的にも徹底

してタブー視してきたために、婚姻した娘の子の名字が違うのは当然と見なされている。ここでもう一つ興味深いことは、誰でも父の名字に従うので、血統は父からのみ、子に受け継がれていくものと理解されていることである。子は母からも50%の遺伝因子をもらっていると考えるのは科学的な常識であるが、韓国人はこの点を見過ごしてしまっている。この点と関連して、韓国人の伝統的な教育において、『明心寶鑑、孝行篇』の“父は私を産み、母は私を育て”てくれたので、二方の恩がとても大きいという内容が反復的に強調されてきた点はさらに興味深い事実である。この言葉は、父系血統を正当化する重要な装置であった。

‘同姓同本禁婚制’は長い間、韓国における婚姻制および親族制度の中心的な軸の役割を果たしてきたが、現代社会においては生活の条件とかみ合わず、多くの社会問題を起こしている。つまり、社会的移動が激しい現代社会において、まったく親族関係を追跡できない男女の間であっても、同姓同本という理由だけで結婚できないことを若者たちが受け入れることを拒否することにより、法的に婚姻届を出すことのできない事実上の夫婦が数多く発生したのである。しかも、彼らの間に生まれた子供は出生届さえ出せないなど、社会的および法律的な不利益を受けざるを得なかったのである。このような矛盾は、1997年7月に憲法裁判所が民法809条1項の‘同姓同本禁婚’の条項に対して、憲法との不一致の判定を下すことにより、1999年1月から完全に無効にされた。現在は、8寸以内の血族間の婚姻を無効にする民法815条の規定のみが、近親間の婚姻を禁止する効力を支えている実情である。このように、伝統的な規範は現代社会の生活条件によって変容を強要されているのである。

第二に、姓つまり名字は絶対に変えられないということである（姓不可変）。すなわち、姓は譲り受けた血統を指し示すものであるので、婚姻であれ、養子縁組であれ、どのような場合でも変えることは許されない。また、女性の場合、婚姻後も依然として元の姓をそのまま維持する。そのために韓国の一つの家庭において姓の異なる人は母、祖母などの、婚姻によって外か

ら我が家に入ってきた人だけとなるわけである。韓国社会で女性が婚姻後もそのまま自己の姓を維持していることが、あたかも女性の地位の高さをあらわしているかのように思われるかもしれないが、実際はこれとは反対で、夫の父系親族集団の権威が強く、婦人はただ‘異邦人’という地位で参加して子を産み、労働を提供するなど、“寄与する存在”としてのみ把握されているのである。伝統社会では女性が家系を継承すべき子供を産むことができないことが、離婚の原因ともなったが、こうして離婚させられた女性は実家に戻っていくようになる。この点においても血縁の重要性がわかる。

韓国の女性たちは、婚姻して自分の実家を離れる場合も、その関係が断ち切れるのではなく、実家の父母が生きている間、そして自分が老年期に入るようになるまでは実家の事情にずっと関心を持ち続ける。たとえば、実家の父母の誕生日、重要な法事、結婚式、葬式などのような行事があるたびに訪問するか、あるいは何らかの方法で関心を示し、なかには家庭問題に干渉しつつ自分の兄弟との間で葛藤を惹き起こすこともあるくらいである。そんな時など、実家の兄弟から“家を出た他人(出嫁外人)がなぜこんなにいちいち干渉するのか”(嫁いだ者が実家のことにいちいち口出しするなという意味)という抗議が出ることもあるが、実は、韓国の娘たちは嫁にいても他人とはならず、実家の問題に引き続き深い関心を持つことからこのような話が出てくると理解した方がより適切かもしれない。

これに関連して、韓国社会では嫁の地位は血縁の意味をよく示していると思われる。先に述べたように、嫁は自分の姓と名前をそのまま維持しつつ、いつまでも夫の家では‘異邦人’となるわけであるから、そのような嫁が夫の家で自分の居場所を固めるのには相当の期間が必要となる。たとえば、代を継ぐべき子供、とりわけ息子を産んでこそ信頼感を確保することができるということもそのひとつである。韓国の民話と伝説または文学作品などからも分かるように、‘嫁入り先の暮らしの難しさ’に関する物語等々は、資料に事欠かないくらい豊富にあり、それらはいずれも‘異邦人’を教育するか、あ

るいは社会化するのに伴う苦痛を物語っているのである。また、そこには姑と小舅と嫁との葛藤に関する話も多く、その場合も韓国の母は伝統的に‘異邦人’であり、非血縁者の嫁よりは自分の血筋である娘のかたをもつのが一般的な傾向であった。

このような文脈からみると、日本の場合、夫の家に適応するのに問題が生じて、嫁は自らの力で解決しなければならず、自分の親兄弟、親類、近隣の人たちからの援助を受けずに孤軍奮闘するであろうし、小舅と嫁との間に葛藤が生じる場合には姑はかえって我が家に入ってきた嫁のかたをもつという中根千枝教授の観察²⁾は、韓国人の考え方とは対照的な形をなしており、たいへん興味深いものである。つまり、韓国の嫁たちは夫の家で難しい問題が出てきて対処できない場合は、自分の荷物をたたんで実家に帰り、実家の人々に助けをもらって問題を解決しようとする。ここでもやはり血縁の情けが介入するわけである。

しかしながら、もう一方で、結婚生活に問題が生じた場合、韓国の離婚女は実家という帰る場所があるということが挙げられる。結婚後にも彼女は実家から完全に離れて出てきたのではなく、血縁関係をそのまま維持している存在である。ゆえに、彼女に問題が生じたときには、実家に助けを求めたり、また彼女も実家のことに持続的に関心を持っている。特に現代の女性は、広くは夫の家での暮らし(シチップサリ)に、狭くは結婚生活のつらさに耐えようとしない。教育歴が高ければ高いほど、とりわけ自分の仕事(職業)を持っている場合にはさらに独立的な考え方をもっているため、離婚が日に日に増加しているのが実情である。

養子縁組みには血縁意識がもつとはっきりと現れる。韓国では養子縁組が父系親族員のみを対象として可能であり、しかも親族の系譜上同じ行列(ハンリョル: generation)をなす者のみを養子縁組することが許される。たとえば、兄弟の息子を養子にすることはできても、代を継ぐ子がいなくて自分の本当の弟を後継者として養子にすることはありえない。孫の代の親族員を養子縁組する必要がある場合でも、いったん形式上では子供を縁組みして、そ

の子供の子供を養子にする方法をとる。また、たとえ生活が困難な非親族員を育て上げる場合があっても、養子として迎えることは、法律的にも慣習的にも許されることではないのである。これは同じ先祖の父系子孫でなければ、血縁関係が全くないものと見なされ、そのような者は父系親族集団の構成員となることはできないという論理から生まれたものと言えよう。

非親族員を養子にしないことは、姓を変えることはできない（姓不可変）という原則とも密接な関連がある。もし、異なる姓を持つ子供を養子にしても、その子の姓を養父の姓に変えることはできない。同じような理由で、再婚した夫婦が、各自、以前の婚姻から出生した子息を持っている場合、一つの家族を構成しても、各自の姓はそのまま維持されるのである。事実上このような家族構成は伝統社会において社会的地位が比較的高い家門の中からはほとんど見られない。このような理由から、再婚女性が以前の婚姻関係でできた子供を連れてくることを再婚する夫の家族や親戚が許さず、子供の扶養責任を負っている女性の場合でも、再婚するとそのほとんどが女性側の実家の両親に子供を預けて育ててもらっていた。しかし、伝統社会において女性の場合には自分の姓というものが何ら意味を持たなかったため、特に問題になることはなかったのである。

3. 父系親族制度の現代的矛盾

韓国人はどんな場合も問わず自分の姓氏を変えられないという、事実上の父系血統を強調する慣習が成文法に反映されているが、これが現代になって様々な問題を惹き起こしている。たとえば、今日において離婚が増加するにつれ、再婚した女性が連れてきた子女の姓氏が再婚した男性の姓氏と異なる場合は、その子供が成長過程の中で心理的な傷を負うということがある。このようなことは、最近起きている父系中心の戸主制を廃止しようとする女性運動の背景ともなっている。おそらくは朝鮮時代の政治的力学関係から始まったためであろうが、韓国人は合法性または適合性（legitimacy）に対して

強い執念を示すといわれている。血縁関係が全くないのなら合法的に養子縁組することができないのだとか、父系につながる親族にのみ血縁意識をもつという考えも、きっとそのような特性があるからであろう。事実、生物学的な血縁関係を問題視するならば、外婚制による父系親族集団間の婚姻が行われていたがゆえに、大部分の韓国人は、どのような形式であれ相互に血縁関係を結んでいるのである。にもかかわらず、父系親族員でない場合には、自分の母方のごく狭い範囲の親戚を除いては、親族関係を認めていないのである。

韓国の伝統社会は、定着した農耕生活に基盤をおく社会組織として、社会的な移動性の程度が低く、人々は、家族や親族のような血縁関係にある構成員、あるいは地域をともにする者同士が相互に緊密な関係を維持しながら暮らしていた。先ほども言及したように、婚姻では集団の外から配偶者を求めつつ、父系親族集団はそれ自体が生活の単位でもあるという血縁意識を共有している父系親族員のまとまりは、それ自体が生存戦略でもあったわけである。

いったん韓国文化に深く根を下ろした血縁意識は、現代社会においても、たとえ弱まったとはいえ、大きな影響力を発揮し、多くの場合、血縁関係の有無が直ちに‘内（うち）’と‘外（そと）’とを区分するものとして認識されている。このことは、父系親族の組織が政治的な選挙に活用されている事例にもよく現れている。‘外’である他人よりも‘内’である我が方が勝つ方がよいという考えが、いまだに根深く残っているために、そういう発想に基づくキャンペーンが可能となるわけである。これは、過去に名のある先祖をもった家門の子孫らが社会的政治的に多くの利益を得、また肩を高く張って生きることができた過去と同じ現象であろうと見受けられる。

全国的規模で組織されていたり、なかには地方組織まで具備しているそれぞれの氏姓集団の宗親会（一種の親族会）は、今日において少なくとも選挙のシーズンともなれば相当な影響力を示し、特に地方政治ではこのような組織が決定的な要因として作用することが多々ある。

選挙に出馬した候補者らも、機会さえあれば、

いつでもこのような一族の親族会の行事に参加して、好感を得ようと努める。自分が所属している親族会に参加することは当然のこと、自分とは関係のない親族会の集いにも顔出し程度でも参加を試みるのは、血縁意識を共有している会員に対して共感帯を形成するための戦略となるわけである。

事実、地域社会の範囲を超えた親族会の組織と活動は、血縁意識が実際の生活単位に限られず、共感的に拡大され適用されていることを示すものである。たとえ離れて暮らし、常に接触はないとはいえ、血縁関係には変わりはないので、その意識がある程度弱まっているとはいっても、その維持には問題がない。例えば、日本の大阪や東京などのように韓国人がたくさん住んでいる海外の韓国人社会では、氏姓集団の親族会組織が必ずと言っていいほど存在しているが、このことを見ても、血縁意識がどれほど根深く、また韓国人の心情に触れることがいかに多いかが分かる。

その代表的な事例として興味深いのが、日本、大阪の「光山金氏宗親会」である。1954年に組織されたこの親族会は、済州島出身の光山金氏親族の組織として、血縁と地縁の二つの第一次的関係に基づき、その構成員たちが日本という host culture に適応する上で、戦略的な装置としての機能を忠実に果たしてきた。特に、この親族会が設立した「光山金氏専用霊園」はほかに類似した例がみられないほど、海外の韓国人社会の中では特異な事例であるばかりでなく、それ自体が韓国人の強い血縁意識を示しているという点で興味深い。奈良県生駒郡平群町福貴にある1300坪の土地に1960年に造られたこの「光山金氏専用霊園」は、現在は有限会社の形で運営されている。ここは設立当時に270個の個別墓地に分割され、すべてが親族会の会員にのみ分譲された。毎年一回、秋夕（チュウソク；旧暦で8月15日）に会員の家族が集まり、慰霊碑の前で合同慰霊祭を捧げる。

さらには韓国人の海外移住の場合も、強い血縁意識が働いている。さる4半世紀の期間にアメリカに移住した韓国人の数が急激に増えて、もはや100万を超えているのは、血縁者間の強い紐帯感を考慮せずには理解することができな

い。すなわち、本国で従事していた職業を外国でそのまま維持していくことは難しく、最初に定着した者が特定の事業を始めておいて、信頼できるパートナーが必要となる、そういういざという時に血縁意識が働くのである。これは、血縁者同士が互いに助け合って生きていこうという一般的な意思を超えて、信頼できる人間は自分の親族のほかにはいないという強い血縁意識が残っているためであろう。

4. 企業経営と血縁関係

企業の運営の場合に血縁関係が重要な変数として作用することは、資本主義原理に背反するとも言えようが、しかし、実際に韓国では親戚を企業経営に参加させることが多い。経営者らは自分が雇用している者の能力の水準が同じ程度であれば、他人ではなく親戚に企業経営に参加する機会を与える方が道理にかなっているという考え方をする。この場合も、経営者らは近い親戚だけが信頼できるという考え方から、彼らと機密を共有したり、あるいは重要で核心的な仕事を彼らに担わせることがよくある。きつと“我が同族は我を裏切らず、また我のために身を粉にして働いてくれる”という期待感からであろう。

韓国のある企業を対象にして人類学的な現地調査を行ったある韓国系アメリカ人教授の興味深い話がある。この会社は親戚の比率が特に高く、職員の場合、兄・弟・おじ・祖父など親戚だらけであった。そこで親戚である会社幹部に、“こんなに親戚が多くては、不正をしでかした場合、会社の運営がどうなるか”と質問したところ、“それでも自分の血筋の者がやったことだから、（他人がしたよりは）まだましじゃないか”という答えが返ってきたとのことである。やはりここでも、血縁関係の有無が‘内’と‘外’との区分の基準となっているわけである。

韓国の企業の中で特徴的にみられる現象としては、企業の所有権と経営権を自分の子供に、それもできれば長男に譲渡する事例がごく一般的である。企業家は自分が起こした事業は成功裏に子供に譲り渡すことがもっとも理想的であ

ると思っており、企業家たちは自分の子供を将来の後継者として育てるために、経営の第一線の要職を短期間で一回り経験させるようにする。経営規模が大きくなるにつれて、企業を専門の経営陣に任せて運営する事例が多いが、こんな場合もある時点に至れば、子供に経営権を譲り渡すことが、まるで当然のこのように、しかも自分のやるべき仕事であることのように見なされている。三星・現代・LG・SKグループなど韓国を代表する財閥も、例外なく経営権を自分の息子に譲るという事例もこのことをよくあらわしている。

ゆえに、企業の繁栄と継続的発展のために自分の子供に経営体を譲り渡すよりは、専門経営陣に任せて根を下ろさせるような企業人を韓国社会で見いだすことは極めて難しく、能力のない息子に企業の経営を委ねて結局破綻させてしまう企業の事例を、たまに韓国のマスコミ界で見受けたりするのも、このような文脈からみれば容易に理解されるのである。

韓国人の強い血縁意識は、教育分野にもよく現れている。大学では多様なソースにより提供される奨学金があり、なかでも一族の親族会の奨学財団基金では、該当する姓氏をもつ学生にのみ提供されている。親族会会員の子供たちが社会的に出世することは、つまるところ自分の氏姓集団を輝かせるものであると思うがために、このような奨学金制度を設けているのである。今日の韓国社会は過度な教育熱で激しい陣痛を感じている。どの親も、自分の子供にだけは社会的に出世して欲しいと願って、高い水準の教育を受けさせようとする。家族と家門の栄光は、即子供の教育にかかっていると思っているようである。子供たちのしたいことは何か、そのために親としてすべきことは何かを考えたり、生き甲斐のある人生を営むことのできるように導き、激励したりすることなどには全く関心がないのである。

このようなことは‘子供への愛’とも言えるかもしれないが、実は自分の血筋（あるいは血縁者）に対する強い執着がその根底にあり、そのため教育課程において学生はひどい競争を経験することになる。我が子がこの競争に打ち勝つためには、親はいかなる犠牲をも甘んじて受

けるというのが両親の心情とでもいうのであろうか、このような風土が過度な教育熱を生み出しているのが現状といえよう。

おわりに

最後に、韓国人の強い血縁意識がもたらした孤児および私生児などの海外養子縁組問題について、少しばかり注目してみようと思う。韓国はかなり以前から国際社会から孤児輸出国または海外養子縁組大国などの汚名を着せられてきた。1950年以来韓国から養子縁組をして海外に出ていった子供の数は、およそ14万名にのぼる。その行き先の大部分が欧米であり、初期に韓国を出た者は、すでに中年期を折り返している年となっている。この養子傾向は現在も継続しており、最近数年間にも2000名余りの子供が海外に養子縁組に出ていった。

1950年代には戦争孤児が多く、また経済的余裕もなかったために、彼らを保護する施設が不足していたことが海外養子縁組の主な原因であったが、現在に至ってもこのような傾向が継続している現象をどのように説明することができるであろうか。この問題を知る人は皆が心を痛めている。じつは、非血縁者を養子にしない強い伝統によって国内での養子縁組が困難である状況に、根本的な問題がある。したがって、未婚の母の私生児、婚姻外に出生した子供が日に日に増加している実情ではあっても、実の両親が養育を放棄した場合、事実上これらの子供を国内で養子縁組する方法がなく、海外に出ていくようになるのである。最近の統計によると、未婚の母の子が海外養子全体の83%を占めているほどだという。しかし、国内での施設保護が円満に行うことができないのなら、かえって彼らが海外の養父母によって大事に育てられる方がいいのかもしれない。とはいえ、これは実に恥ずべき、かつ胸を痛める話であるには相違ない。このように、海外養子縁組の子供たちは、父系親族制度の伝統から非血縁者を養子にしない韓国文化の犠牲者(victims)とも言えるのである。

以上において、韓国人の血縁意識がどれほど

強く、またそれが現代社会においても韓国人の行動様式にどれほど重要な要因として作用しているかをみてきた。韓国人がなぜそこまで血縁に執着しているのかを明らかにすることは容易ではない。もちろん、それが過去の伝統的な農耕生活から生まれた慣習であり、また文人たちが支配層を形成していた朝鮮時代の儒教文化の影響が大きいという点などは指摘できよう。

誰もが家門中心に団結し、また家門の地位に応じて評価され、血縁に基づいて自分自身を特定の家門の構成員として同一化すること、それ自体が伝統社会での生存戦略の一つであった。すなわち、家門を離れては独自のアイデンティ

ティを確立することのできない時代を生きる知恵であったのである。しかし、いったん韓国人の行動様式の一部として固められた血縁意識は、時代的な状況が変わった今でも強い慣性を発揮しつつ、現代社会の隅々まで根深く残っているのは特徴的であると言わざるを得ない。

注

1. 崔在錫, 『韓国家族制度史研究』, 1983, 508~553頁 参照.
2. 中根千枝, 『タテ社会の人間関係』, 講談社, 1967, 40頁 参照.

Patrilineal Ideology in the Modern Korean Kinship System: Continuity and Change

Mun-Woong LEE

(translated by Chi-Mi To)

One of the important keys for understanding Korean social organization seems to be the patrilineal ideology in the kinship system. In the Korean tradition, people tended to reckon their ancestry through the male line only. Koreans were accustomed to forgetting their kinship relationship to their maternal relatives quickly beyond their mother's natal family, while they considered patrilineal kinsmen, almost up to the founding father, as members of 'their own group,' on whom information has been well documented in their genealogical book.

This emphasis upon patrilineal ideology has survived in various aspects of the way of life of contemporary Koreans, in modified forms. There are two principles noticeable in the Korean system of naming: (1)one keeps his/her father's family name, which is supposed to continue along the male line eternally, and (2)one cannot change his/her family name.

This kinship ideology worked well in traditional Korean society, where kinship was the most important and basic unit of social organization. In contemporary Korea, it has brought about some serious social problems which seem to be in contrast to the spirit of humanitarianism. With their strong patrilineal ideology, Koreans are not supposed to adopt anyone who is not a patrilineally related kinsman. However, there are many illegitimate children, or children abandoned by their divorced parents, due to the changed way of life

of modern Korean society. These children have serious difficulties in getting adopted into non-kinsman's families. This is the main reason why so many tens of thousand Korean children have been sent abroad for adoption so far, mostly to American or European families. The number of overseas Korean adoptees, since 1950, is said to be over 140 thousand.

For a long time, there was a strict prohibition against marriage between a man and a woman having the same family name, that is, patri-kinsman. Children born to such a couple were regarded as illegitimate. Because of the serious social problems those illegitimate children encounter, the limits of incest taboo have recently been narrowed down to close patri-kinsmen only, by amending the marriage law. And the prohibition against the change of family name has also been seriously challenged by the women's movement. Today there is a growing tendency towards the dissolution of marriage. If a divorcee gets remarried and brings children from the former marriage with her, those children may encounter social discrimination due to their family name being different from their stepfather's.

These are some of the problems arising due to the discrepancy between traditional kinship ideology and the changed lifestyles of modern Korea. Though there has been some progress made in accommodating to contemporary social life, traditional patrilineal ideology still exercises its influence over many aspects of Koreans' everyday lives.

Keywords : Korean kinship system, patrilineal ideology, overseas adoption,
Korean naming system, incest taboo